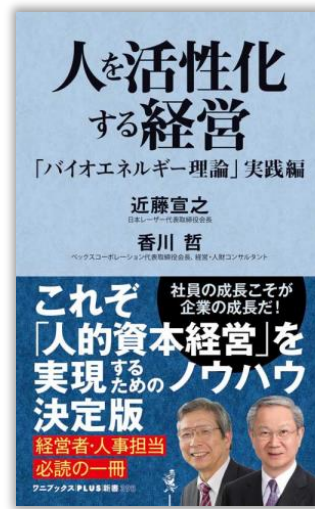


心志有情

2024年も2ヶ月が過ぎ、春を意識する時期が近付いてきた。昨年は「1」の年であり、大きな成果を手に入れることが出来る年だった。そして今年には、「2」の年であり、手にした成果から人との縁が繋がって、新しい人間関係が始まっていく。私としては、一昨年から取り組んでいる書籍出版の中でも、株式会社日本レーザの近藤宣之会長と共著として制作した3冊目『人を活性化させる経営』が、昨年10月に発売された。近藤会長は当然のことながら、共にトレーニングに励み、ご協力いただいた会員の皆様にも改めて心よりお礼申し上げる。この書籍では、近藤会長に約20年学んでいたのだいたバイオエネルギー理論を、どのように活かして日本レーザ社員との関係を構築し、人を大切にする経営を図ってきたのかという手法を掲載している。巻末に日本レーザの「クレド」を掲載していたのでぜひご覧いただきたい。

書籍を出版してからも成果があった。バイオエネルギー理論に興味を持っていただいた病院の先生や経営者の方から問い合わせがあり、実際に話をして会員に

なっていた方がいた。さらに年が明けてから旧知の方から久しぶりに連絡をいただき、これまでの書籍について話す機会を得られたこともあり、大変嬉しく感じている。まさに「1」と「2」の年の繋がりが発揮されていて非常に驚いている。



また、1月下旬に当社はオフィスの移転を行った。元のオフィスビルは建て替えは、株式会社メガクリエイト齋藤社長に大変お世話になった。皆様から移転の祝いも頂戴し、ここで改めてお礼を申し上げる。新オフィスからは千鳥ヶ淵や武道館を臨むことができるため、桜の季節は、ぜひ一度ご来社いただきたい。

現在新たに4冊目の書籍出版を検討している。『人を活性化させる経営』でも触れているが、昨年まではトレーニングにて利害関係者との関わり方をお伝えしてきた。今年からは、トレーニングのバージョンアップを行い、利害関係者に関わりながら「思い通りの未来を築く方法」についてお伝えしており、書籍化させるべく動いている。人は現状に不満があるという思いで変えようとする。しかし、それは原因を周りのせいにしていているが、バイオエネルギー理論では、「周りの世界は自分が築き上げた世界」と考える。

「今」の世界は「過去の言動の結果の世界」のため、周りを変えることはできないと受け入れて欲しい。特に経営者の皆様には強く考えてもらいたい。社員が思い通りにならないのは、経営者の過去の日常的な言動の結果である。そのためマインラス現象にはコメントせず、自分が望むプラスの世界の言葉を発すること、思い通りの未来が築かれていく。

【思い通りの未来を築くための3つのステップ】

◎ステップ1

「今」は自分がつくり、引き寄せた結果の世界であると気づく

◎ステップ2

「今」に納得し、「気づきました」と宣言して過去の言動を清算する

◎ステップ3

思い通りに進んだときの成功体験を積み重ね、自信を持って、思いをきちんと伝える

思い通りの未来を築くためには、まず「今」は「過去の結果」ということを気づいて受け入れる必要がある。結果の世界は自分自身が作った世界だ。気づかなければ思い通りの未来は築けない。決して他人のせいにすることなく、自分を見つめ直し、考え方を改めて欲しい。この世は気づいた者勝ちだ。今後どのような言動で人間関係を築いていくかが重要となる。その結果があなたの「思い通りの未来」になるのだ。

弊社としても更なる飛躍した姿を皆様にお見せできるよう、全力で努める所存だ。

二〇二四年 三月

代表取締役会長 香川 哲

社員とともに 成長し続ける会社へ

水島ゴム工業用品株式会社
代表取締役 渡邊 大観氏

バイオナンバ
516
262



父からバトンを受け継ぎ30年、社員第一に
仕組みを作ってきた渡邊社長の思いとは

渡邊社長の生い立ち

水島ゴム工業用品株式会社（以下…水島ゴム）は、昭和36年（1961年）7月に横浜ゴム株式会社（以下…横浜ゴム）の岡山県総代理店として父・行雄氏（バイオナンバー565）が創業。現在は工業用ゴム製品を中心に、建設や土木、空調設備等の資材販売と施工管理を行っている。渡邊社長は平成3年（1991年）に社長職を引き継ぎ、2代目社長に就任。令和3年（2021年）に創立60周年を迎えた。

渡邊社長は水島ゴムの創業と同じく昭和36年（1961年）に渡邊家の長男として生まれた。幼い頃とはとも活発的で野山を駆け回り元気に遊んでいたという。昆虫採集が好きで、夏になると早朝から近くの裏山へかぶと虫を採りに出かけた。運動も得意で冬になると毎年スキーもたしなんだそうだ。父は祖父・数馬氏の地盤を受け継ぎ岡山県議会議員としても活躍しており、社長と議員の二足のわらじを履き、多忙を極めていた。当然父と遊んだ記憶はない。だが、幼心にその大変さを理解していたので、不満はなかった。当時は会社の裏に自宅があったため社員に遊んでもらうことも多く、会社は身近な存在だった。「お前が後を継ぐんだ」と物心つく頃から言われていたこともあり、そういうものなのかなと思っていたそうだ。父は一言でいえば親分肌。親子ながら性格は全く違った。中学生の頃は思春期ということもあり、反発したこともあったそうだが、高校生になると自然と落ち着いていった。中学を卒業する頃からオートバイに憧れており、届ければ免許取得の許可がでる普通科の高校を選択し入学した。はじめは仲の良い友人と共に工業高校に行きたいと父に訴えたが叶わなかったそうだ。だが、最終的な選択は間違っていなかった。伸び伸びとした校風がとても合い、その結果反発心などが薄れていったそう。入学後、8月に16歳の誕生日を迎えるとすぐ免許を取得した。校則で禁止されていなかったものの、驚いた学校側からは最初反対され親にも連絡があったが、事前にきちんと伝えていたことを主張し続け、最後は認めてもらった。登校はバイク禁止だったが、内緒でバイクで通学したりと楽しい日々を過ごした。交通違反をしたら免許をとりあげると言われていたこともあり、違反は1回もなかった。県議会議員を祖父と父に持っていたことが自分の中のブレーキになっただけかもしれない。「慎重な「1」もあれば

大胆な「6」もあり、理屈をこねる「5」も自分の中にあると感じる。516の性格がその頃から出ていたんでしょね」と渡邊社長は笑って話してくれた。バイクは好きで今でもずっと乗っているそうだ。

高校卒業後は大阪の大学へ進学。下宿先と一緒に住った同級生3人とすぐに打ち解け親しくなった。内1人がサーフボードを買いに行くのに同行したのをきっかけに、今度はサーフィンに心を奪われることになる。授業がある期間はバイトに明け暮れることをため、土日は京都の丹後や和歌山、伊勢へ。そして長期休暇に入るとみんなで車に乗りこみ宮崎へ波乗りに出かけた。低気圧がくるとワクワクして寝られず、海へ行かねば！と夢中になっていた。ほぼ実家へは帰らず、気づけばいつも海にいた。友人たちとの交流は続いており、今でも年に1回、宮崎でゴルフとサーフィンをして共に過ごすそうだ。

大学卒業後はアメリカ・オハイオ州へ留学。母方の祖父が数十年前アメリカにいたこともあり、昔からアメリカに憧れがあった。叔父が在米していたため、留学の準備など力になってくれた。意図的なのか英語を覚えるまでは海のないところを勧められ、最初の1年はサーフィンがでなかったが、代わりにゴルフを覚えた。語学学校で英語をマスターしたのちは海岸沿いの大学を探し、カリフォルニア州へ。大学と同じく経営学を学び、2年半を過ごした。

帰国してから

息子がアメリカ生活を満喫し、なかなか戻ってこないかと心配していたのかもしれない。あるとき、父から「横浜ゴムが受け入れてくれるから戻ってこい」と連絡が入った。もともと横浜ゴムの総代理店としてスタートした水島ゴム。事業を継承するうえでの修行先としてうってつけだった。さらに所在地は神奈川県平塚市。湘南でサーフィンができる！と二つ返事で日本へ帰国した。

昭和61年（1986年）25歳で横浜ゴムへ入社。商品を作る際の納期の管理や受注後の処理、工場との窓口などの事務から始まり、営業も経験した。コンベアーベルト部門で1年、建設資材部門で1年といった感じで、水島ゴムが取り扱っているものを横浜ゴムでは一通り学ばせてもらった。その中で最後に担当してくれた上司に「父の会社に戻っていきなり経営者になるのは大変だ。戻る前に学校に入り勉強したらどうか」と財界二世学院

を勧められることになる。後継者の子息を教育するための教育機関だという同学院へ自分でパンフレットをもらいに行き興味を持った渡邊社長は、母や会社の幹部へ相談。皆賛同してくれ同学院へ入学した。父の選挙の手伝いで一時休学したこともあったが、ここでは30歳までまた多くのことを学んだ。

社長就任からの香川会長との出会い

平成3年（1991年）、父が倉敷市長に当選。

それまでも議員として勤めていたために会社に人間ではなかったが、いよいよ両立が厳しくなり、「お前、社長をやれ」と父に言われた。自身でも潮時だと考えていた渡邊社長は岡山へ戻り、代表取締役就任だったが、後継者である渡邊社長が戻られたことで、やっと社内にてくれるトップが誕生したと社員も歓迎してくれた。社長就任時の幹部は当然渡邊社長より年上。NO.2は父の大学の後輩、あとは叔父が3人いた。叔父は甥である渡邊社長に対して「お前はまだまだできてない」と心配しながら小言を言ってくることが多く、当然やりづらかった。

内1人の叔父は協力的でよく支えてくれたが、社内のピラミッドが上手く成り立たず苦戦していた。そんなときに1通のDMが届いた。普段から沢山のDMがくるが、なぜかそのDMが目にとまり気になった。面白そうだな、1回話を聞きに行こうとなり会場へ行ってみた。それが香川会長との出会いだ。今現在、マスターコースは奇数月に合同トレーニング、偶数月に個別ミーティングを行っているが、渡邊社長が入会された約27年前は合同トレーニングのみ毎月開催されており、岡山会場でもやっていた入会してからはずっと奥様・美軌様（バイオナンバー251）と夫婦でご参加され、お二人でよく気づきの話などを会話の中でしていたそう。トレーニング会場では他の会員様それぞれに起きた話を聞くたびに、「本当にこんな大変なことが起きるのか！？嘘やろ！？」と驚きの連続だったそう。実際トレーニングを始めてから急に起こる出来事の数はとても不思議だった。だが、もともと20代の頃から自分の内なる世界のことに興味があり、素直な性格もあって、すんなりバイオエネルギー理論を受け入れられたそう。現在、研修に奥様は参加していないが、今でもバイオエネルギー理論の話をすることもある。エネルギーが違うお二人は、当然

物事をみる視点は異なる。だが、意識している根本的なことは一緒なので、話はとても合うし理解してくれる大切な存在なのだそう。

トレーニングを通じての気づき

長年トレーニングをしてきたことで、色々な事を受け入れる力がついた。一見にも関係ないものだとしても、それは自分がつくりあげた世界であり、変えられるのは自分しかいないと捉えられるようになったそう。世の中の出来事は、どこかで自分と関わっており、潜在の影響がすごくあると渡邊社長は感じていたそう。

また、長年継続している幹部社員研修も役立っているという。最初はNO.2の研修から始まり、今では役員・幹部社員あわせて4名の方が香川会長の研修を受けている。研修を受けることで、確実に幹部がそれぞれの立場を自覚し、幹部としての役割を全うできるようになってきた。研修の中で何度か同じことを繰り返し伝え、潜在意識に落とし込んでいくことで、社員の水島ゴムの経営理念の中に『**わが社は、人間完成をめざして学習し練磨する道場**』という言葉がある。月曜日に神棚に向かって唱和するこの一節は、会社を通じて成長に繋がるものを一つでも得てほしいという渡邊社長の思いが込められている。会社は、社長一人が成長したところで続かない。社員の精神を育て一緒に成長してこそ、会社が成長していくのだ。バイオエネルギー理論を学び続け、沢山の仲間の気づきに触れてきたからこそ、分かることがある。20年以上欠かさずトレーニングに励んできた渡邊社長でも毎回学ぶことだらけだという。「短い期間じゃ分かんせんよ」と渡邊社長は笑っておられたが、毎月休むことなく何十年も継続するというのは本当に難しいことだろう。

また、香川会長との一番の思い出を訊ねてみると、「お墓参り」という言葉が返ってきた。元よりご先祖様を大切に、親よりもお墓参りへ行っていた少年時代。ご先祖様がいらっしゃるから自分がいる。誰かひとりでも欠けていたら自分はいない、というのを幼い頃よりよく考えていたらしい。そして、香川会長にお墓参りのやり方を教わってから、その考えはより強くなった。渡邊家のお墓の隅から隅まで掃除し、ピカピカに磨いてくれているのを見て、血の繋がりのない他人がこんなに綺麗にしてくれたのを子孫の自分が保たなくてはうすると反芻（はんすう）したそう。それからは

毎月1回、お墓参りをし必ず綺麗な状態を保つよう心がけた。「沢山のことを教わったが、何より会社以外で相談できる相手がいる、色んなことを話せるというのは本当に助けられてきた。そういう存在がいらない経営者は多い。気軽に相談できる香川会長の存在は大きかった」と教えてくれた。

今後の目標

受け継いだものを大切にし次の世代に引き継ぎ、水島ゴムを選んで働いてくれる社員や地元のお客様が幸せになれる環境を整えていきたいと渡邊社長は語る。会社を今以上に大きくしたいという思いはなく、それよりも確実に利益を出し、社員に少しでも多く還元できる企業体制にしたいそう。そのためにも、今のメイン事業である柱を太くしていき、揺るがない屋台骨をつくるのが目標だ。

また、今年30歳になるご子息・海人氏（バイオナンバー235）も横浜ゴムでの研修を終え、昨年8月に戻ってきているが、事業継承を焦る必要はないと考えている。会社の中をきちんと把握してもらい、継げるタイミングを見定めたいうえでバトンタッチしたいそう。自身が若くして社長職を引き継ぎ大変だったからこそ、引き継ぐ体制は万全に整えたい。

社長は最終判断をする役割であるから、業務をまわしていくためには社員に主体的に動いてもらいたいといけない。責任は社長が持ったうえで社員が安心して仕事ができる仕組みを、長年かけて作ってきた。その成果も実り、数年前から無借金経営にすることができた。

「社員が安心して働ける環境をつくる、お客様が安心して取引できる会社になる」渡邊社長の思いは、これからも自身と会社を成長させる糧となるだろう。

水島ゴム工業用品株式会社
●所在地/岡山県倉敷市
●創業/昭和36年7月
●業種/工業用ゴム製品等の販売
●社長/渡邊 大親氏
(1961年8月27日生まれ)

バイオナンバー

516
262

<http://mizushimagomu.co.jp/>

大谷氏は、1994年岩手県水沢市（現在の奥州市）で生まれた。社会人野球選手だった父・徹氏と元バドミントン選手の母・加代子氏のスポーツマンの両親の下で育った。小学3年生で「水沢リトルリーグ」に入団。入団当初からストレーターのノビが凄く、小学5年生で球速110km/hを記録し、全国大会に出場した。中学生になると、父がコーチを務める「一関リトルシニア」に入団。こども全国大会に出場。場外ホームランを放ち、歩行者用信号機を破壊したことや、球速も120km/hを超えるなど、投手・打者として活躍した。高校は大谷氏が中学3年生の時に、センバツ大会決勝に進出した花巻東高校のエース、菊池雄星氏（バイオナンバー521）に憧れて同高校へ進学。監督、佐々木洋氏（バイオナンバー161）の教えで、夢を叶えるために必要な行動・要素を「目標達成シート」にまとめていた。シートの中の1には、「ドラフト1位で8球団から指名されること」を掲げていたそうだ。この時から教えるに素直に従い、「2」のコツコツ努力する姿勢が表れている。

3年生の夏には、アマチュア野球史上初の160km/hを記録し、9月には世界野球選手権大会の日本代表に選出され、四番・指名打者として活躍。その後、10月に行われたドラフト会議で日本ハムが交渉権を獲得。大谷氏はアメリカで挑戦したい気持ちが強かったが、日本ハムから、4度の入団交渉と投手と打者の「二刀流」育成プランなどを提示され、2012年12月に日本ハム入団を表明。開幕戦から先発出場を果たした。2016年までに、日本プロ野球史上

メジャーリーガー

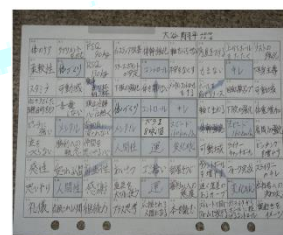
おおたに しょうへい

大谷 翔平氏

1994年7月5日生まれ

224

554



高校時代に作成した
「目標達成シート」

文／友井 志隆

イラスト／Kumi Furuya

初の2度の「同一シーズンで二桁勝利と二桁本塁打」を達成。猛打賞や最高勝率の投手三冠など、日本ハムの4年ぶりのリーグ優勝に貢献した。

2017年、念願のメジャーリーグロサンゼルス・エンゼルスに移籍。チーム合流時に、積極的に挨拶に行きオンラインゲームで交流を深めていった。合流直後にチームメイトと良好な人間関係を築いた点に「2」の人の輪の中心人物になる能力が発揮されている。2018年開幕戦から、3試合連続で本塁打を放ち、デビュー登板から2試合で12奪三振はア・リーグタイ記録、開幕から10試合で2勝、3本塁打という99年ぶりの快挙を達成した。6月に右肘靱帯を損傷、9月に別の損傷も発見され、10月に靱帯再建手術を行った。2019年、20年も怪我により、思うような結果を残せず悔しい結果に終わった。

2021年、メジャーで初めて投打の二刀流として怪我無くシーズンを完走し、前年までの悔しさをバネに、素晴らしい結果を残した。これらの活躍が評価され、シーズンMVPに史上19人目の満票で選出された。また、6月の試合で、四球で一塁へ向かう途中、大谷氏は落ちていたゴミを拾ったことが、アメリカメディアで取り上げられ話題となった。「目標達成シート」の中の「運」の項目の中に「ゴミ拾い」も掲げていた。佐々木監督から「ゴミを拾うことで運を拾うんだ。そして自分自身にツキを呼ぶ。そういう発想をしなさい」という教えがあり、今でもゴミを拾い続けている。高校生の頃にはすでにゴミ拾いを「運を呼ぶための行動」として日頃から行っていた。また、子供たちに夢を実現するための努力、筋道を描くことの大切さの観点から、大谷氏の「目標達成シート」は、小学校5年生の道徳の教材となった。

その他にも、「目標達成シート」には、「愛される人間」、「礼儀」などが掲げられていて、たくさんの方やユニフォームに丁寧にサイン行なうなど、積極的にファンと交流する姿が、多くの人々を幸せにして夢と希望を与えている。

2022年も活躍を続け、約10年ぶりとなる、「同一シーズンで二桁勝利と二桁本塁打」を達成。2023年はWBC（ワールド・ベースボール・クラシック）に出場し、エース兼打者として3大会ぶり3度目の優勝に貢献。WBC史上初の投手・指名打者部門でのオールWBCチームに選ばれ、MVPも獲得したシーズンではアジア人史上初となる本塁打王を獲得。さらに、メジャー史上初2回目の満票でシーズンMVPも受賞した。

11月には、野球に興味を持つきっかけになることを願い、日本国内の約2万校の小学校に、約6万個のグローブを寄贈した。12月はドジャースへの移籍を発表。移籍金は北米4大プロスポーツリーグ史上最高額の10年総額7億ドル（約1015億円）となった。また、2月29日に元バスケットボール選手の田中真美子氏（バイオナンバー453）との結婚を発表。私生活でも「新たな環境でのスタートとなります」と報告し、世界中から祝福されている。

バイオナンバー224の人は、最後までコツコツと努力する姿勢を貫き、どんな困難も乗り越えていきます。こうした人間性や人柄に魅了されて多くの人が周りに集まってきました。こうした特性が発揮されたことで、試合中にゴミが見えるほど周りをよく見て、気遣いができる人柄が発揮されている。このような行動がツキを呼び、世界中から愛される存在になったと言える。チーム移籍後の大谷氏の活躍に注目したい。